

## 徹底した意味理論の基盤論理はいかなるものであるべきか

三上 温湯 (Onyu Mikami)

東京都立大学

学術振興会特別研究員(DC)

本提題では、M・ダメットによる意味の理論(Theory of Meaning)を主題とし、対象言語の意味について、十全な説明を行うためのメタ言語の選定の重要性和、そのような言語(に採用される論理)としての直観主義論理の拡張可能性について考察する。

ダメットは、従来一般的に受け入れられてきた意味理論、すなわち、真理条件的意味理論では、その意味理論を使用するエージェント間で、すでに一定の共通のメタ言語の理解を持っているということが前提されているということを指摘した。この意味理論においては、対象言語の文について、既知と前提された真理条件を結び付けることが中心的課題となる。彼はこれを「穏健な(modest)意味理論」と呼び、以下に説明する彼が本来構想する意味理論とは大きく隔たっていることを強調した。彼の構想した意味理論は、言語習熟話者の持つ、当該言語についての理解そのものを表現するものであり、これを「徹底した(full-blooded)意味理論」という。より適切には、言語Lの徹底した意味理論Tとは、次のようなものだと考えて良いだろう。すなわち、その言語の習熟話者(competent speaker)が与えられたときに、その話者に対してまさにその理論Tの理解を帰属することができるような理論であり、また逆に、この理論Tの理解を帰属することができるような人がすなわち、言語Lの習熟話者であるようなそういう理論である。このような理論は、まさに言語習熟話者の理解そのものを具現するものになるだろう。しかし、ダメットはなぜこのような理論を構築しようとしたのであろうか。そもそも、ここで問題となる、言語習熟とはいかなることか。言語Lに習熟しているとは、その言語を使用して多様な実践が行えるということ、とりわけ、この言語使用(と等価と言えるような他の言語の使用)が欠けていたならば、決して実現できないであろうような行為を遂行できるということだと考えてよいだろう。実際、ダメットに深く影響を与えたウィトゲンシュタインによれば、言語表現の意味を理解しているとは、その表現を適切に使用する能力を有しているということ、もっと踏み込んでいうと、その表現を通じて、決して自明でない実践を多様に展開できることである。以上の考察の帰結としてダメットは、意味理解を実践的能力として表現するという課題にとっては、意味理論の内部で、我々の理解可能性を超えてた、大局的・状況超越的な二値原理(それに立脚した古典論理)を採用することは不適切であることを指摘し、文の意味が、その文の(証明の)実践と結びつきのもとで理解される、直観主義論理を擁護したのである。

以上のようなダメットの考えをよく例証するものとして、無限領域上の量化を含む文 $\forall x\varphi(x)$ を考えてみよう。あるエージェントが、このような量化を理解しているとは、どのようなことだろうか。これに答えるには、意味理解とは言語使用の能力なのであるから、適切な使用事例に着目すること、あるいはむしろ、そうした使用を行って

るエージェントが、その使用においてどのような理解を顕現させているか（どのような理解を持っているからこそ、そうした使用ができるのか）を明らかにすることがポイントとなる。つまり、最も典型的には、正しい（十分に確立されている）そのような量化言明を行なっている（主張している）エージェントが持っている（そうしたエージェントに帰属できる）理解内容を考えることである。

では、この量化言明を主張する主体は、何を理解していると言えるだろうか。それは、最も典型的には、量化領域の任意の対象について、それが問題となっている性質 $\varphi$ を持つということを示すための、手順・手段を把握していることである<sup>1</sup>。

一方で、古典論理に立脚する真理条件的意味論による意味の説明に関して、この量化言明を主張する主体が理解していなければならない内容とは何かを考えてみよう。こうした意味理論では、量化の領域の成り立ちや大きさは度外視され、端的にこの文が真である条件、つまり、その量化領域に含まれる対象全てが例外なく性質 $\varphi$ を満たす、ということがこの全称文の意味だとされる。したがってこの説明の下では、この量化言明を主張する主体は、そこで問題となっている無限個の全事例について、それらがそれぞれ真であるということを通覧していなければならないということになる。このような全称性の捉え方は、我々の持つ言語実践の能力からかけ離れていることは、ほとんどの人が認めるであろう。従ってこの説明は、当該の全称文を主張できる人が持つ理解内容の説明として、妥当とは言えないのである。

これに対して、ダメットが帰納法を全称文の基礎的な意味とみなしたことはある程度もっともといえよう。つまり帰納法による説明では、この全称文を主張する人は、 $\varphi(0)$ が成立することと、どの $n$ についても $\varphi(n)$ が成りたてば、 $\varphi(n+1)$ が成り立つということを論拠に、全称文を導くという手続きができる。つまりそのような人の持つ理解とは、0 から、後続者関数の任意有限回の繰り返しという、そのそれぞれは有限的な操作を行い、それによって与えられた対象について、性質 $\varphi$ を満たすということを示す実践的能力として説明されるのである。

本提題では、以上述べてきた徹底した意味理論の指針に添いつつ、その自然な拡張として、可算無限個の前提を持つ推論規則である、 $\Omega$ 規則の導入を検討したい。 $\Omega$ 規則は、自然数によって添え字付けられたあらゆる変項を考えることにより、個別事例を適切に揃えるというものであり、先ほど触れた、古典論理のような無限の捉え方とは本質的に異なるものである。また、ダメット自身の記述の中にも、 $\Omega$ 規則にあたるものの適用を行なっているとみられる箇所が見られる。これらの点は未だ議論を要するところであるので、本提題では、これらをサポートする具体的議論を提示し、意味理解を記述するメタ言語としての直観主義論理の拡張の具体的方途を示す。

<sup>1</sup> これはまさに、 $\forall$ の導入則を適用する能力に当たっている。ここでは詳論できないが、直観主義論理の結合子の意味は、その導入則によって説明される。